

コーディネーション・トレーニングの学校体育への応用 —日本の昔遊びの教材化を中心に—

日本体育大学 児童スポーツ教育学部 教授
久保 健 (Takeshi Kubo)

私はこれまで、徳島大学の荒木秀夫氏の提唱する「コーディネーション・トレーニング」の考え方や実践に学ぶと同時に、特に、日本の子どもたちによって古くから遊ばれてきた「昔遊び」の中に、コーディネーション・トレーニングの機能を持つものがあるのではないかと考えて、くまりつき・石けり・なわとびなどを文化的素材として、学校体育の「体ほぐしの運動」としての教材化を試みてきた。「おにごっこ」についても手をつけてみたが、その膨大な多様性と複雑性から、今のところ教材化を手がけるには至っていない。今後の課題である。

これらの「昔遊び」は、多くの子どもたちに遊ばれ、様々に変化してくる中で、身体操作についてもルールについても大きな多様性を持つに至っている。また、異年齢で遊べるための「みそっかすルール」などの応用性も豊かであり、その場その場の遊ぶ者や遊ぶ環境や用具などの条件に応じて、次々と姿を変えながら遊ばれるところに特徴がある。

例えば、「まりつき」には、弾まない「まり」を使って遊ばれていた時代から、①「お手玉」のような「投げ上げて一受け止める」遊び、②紙風船のような「上に突き上げる」遊び、そして③地面に「ついて弾ませる」遊びなどのバリエーションがある。

「石けり」には、①石を使わない「うたケン」、②石を身体各部にのせて運ぶ「石運び」、そして③地面に案山子や長方形の枠を描いて、そこに石を投げ入れ、ケンケン跳びで移動し、石を拾ったり蹴って移動させたりするおなじみの「石けり」などがある。

「なわとび」は、これまでの学校体育では集団で8の字跳びの回数を競ったり、一人なわとびで技の難易度を競ったりする形で教材化されてきたが、自分でまわす「なわ」や他者がまわす「なわ」をどのように跳ぶかを組み合わせることや、「なげなわ」などのなわを使った遊びも視野に入れることで、楽しくコーディネーション能力を耕すことに通じる

教材化を構想することができる。

またさらに、これらの遊びに「わらべ唄」を同伴させることで、楽しさが増し、また、コーディネーション能力をより豊かに耕す可能性がふくらむ。

今回のシンポジウムでは、こうした学校体育の教材化の可能性について報告したい。